状況になって、やっと英語に対する抵抗感がとれてきたと言うことなのでしょうか。

学校生活の中で日本語以外の言葉を使うことを禁止しているわけではありません。特に英語については、休み時間にあちらこちらで英語の会話が聞こえるぐらいの方が、帰国生でない子どもたちの経験としてもいいのではないかとさえ思います。しかし、なかなかそのようにはなりません。英語の方が楽に話せる子どもたちも、早く日本語の世界の友達の仲間になりたいという気持ちがありますし、小学生は、英語で生活して来なかった子どもたちが、言葉の学習のためにわざわざ英語で話そうというほどの年齢ではありません。そろそろ、英語を気兼ねなく話すことができ、それが自然に耳にはいるような場面を意図的に作ることも考えてよい時期になったかなとも思います。

◆日本の文化なのか

私も、「外国人の先生」の立場になったことがあります。アメリカで、日本語イマージョンのクラスを担当していたときのことですが、そのときは、啓明のイギリス人の先生のようなさびしさは、あまり味わうことがなかったような気がします。

アメリカの子どもたちは、だれにでも英語で話しかけてきます。アメリカには、いろいろな人種の人が住んでいて英語を話しているので、子どもたちも自分が英語で話すことがどんな相手にでも理解してもらえるという安心感があるのかもしれません。

それに対して、日本の子どもたちは、外国人は日本語を理解しないものだという意識をもっているので、日本語で話しかけることがためらわれるのかもしれません。

先日、多数の韓国の先生方が啓明を訪問されました。いっしょに昼食を食べたのですが、あるクラスには日本語も英語も得意でない先生たちがいらっしゃいました。すると、みんな、どうしていいかわからず、場がもたなくなって、しいんとしてしまったということでした。こんなとき、アメリカの子どもたちなら、身振り手振りを交えながら、ともかく英語でいろいろ話し続け、少しでも通じたらみんなで喜ぶという展開になるのではないかと思いました。

日本に住む外国人でも、日本語をよく理解する人はけっして少なくありませんし、啓明のイギリス人の先生も、日本語はかなり上手な方です。それに、日本にいるのならば、相手が理解するかどうか分からなくても、まず日本語で話しかけてみることは当然のように思われます。でも、日本の子どもたちには、それは、なかなか難しいことのようです。ここにも、ある種の心のハードルがあることが感じられます。

日本語に挑戦

日本人でも、とても小さい子どもたちにはあまりそのようなことはないと思われるので、このハードルは、日本の文化の中で成長するうちにだんだんと作られていくのだと思われます。

もし、そうだとするなら、外国で生活する日本の子どもたちは、この種のハードルから自由に育つことができるかもしれません。それは、現地校に通う子どもたちにも、日本人学校に通う子どもたちにも言えることでしょう。

外国で育つ子どもたちへの期待は、こんなところにもあります。

啓明学園　初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
電話：042-541-1003
ホームページ：www.keimei.ac.jp
E メール：kokusai_info@keimei.ac.jp

佐々先生が日本語イマージョンで教えておられた現地校を、帰国子女受入れ校の先生たちと一緒に訪問し、先生のクラスの子ども達と話したことがあります。

先生が指摘されるように、そのアメリカ人の子どもたちは、イマージョンで身につけた日本語で、英語も交えて、初対面の私達にどんどん質問をしてきました。そんな「心のハードル」を越えた子ども達を見て、一人の先生が「アメリカ人の子どもは、明るいね」と微笑んでいました。

私は「言葉や文化への抵抗感」という言葉で表現しますが、佐々先生の「心のハードル」を乗り越えるスキルは、トレーニングで身につけることが出来ます。無意識でそのトレーニングを積んだ子どもが、外国の子どもや日本の帰国児童生徒の中に多く見られるのだと思います。

佐々先生は小学生ですが、私は日本の大学生と接していて、日本の子ども・大学生に、コミュニケーションの基礎となる「心のハードル」を飛び越えるスキルをぜひ身につけて欲しいと願っています。